



TITLE:

<大會抄録>釋對揚

AUTHOR(S):

伊藤, 道治

CITATION:

伊藤, 道治. <大會抄録>釋對揚. 東洋史研究 1982, 41(3): 604-605

ISSUE DATE:

1982-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153861>

RIGHT:

劉・張兩總督と趙・何嗣焜・盛（貫辦、南洋公學關係者、三人とも武進縣出身）との兩者を媒介したこと、その際その重要な一環をなす劉總督説得を張馨が南京・上海滯在中に行なったことを、前掲の諸資料から實證、(三)ところが、張馨の日記にその説得の記述を缺く、實は右の南京・上海滯在中その二日だけ記述のない五月二七・二八日にそれがなされたこと、前掲の諸資料から推論（關與しつつ同様その記述を残していない例あり、陳三立・沈曾植・湯壽潛等）、彼の説得の内容を検討し、當時の東南互保觀、その他一般的政治情況を考察すること、とする。

呂坤の鄉村對策と華北農村

谷口規矩雄

呂坤（一五三六—一六一八）が明末、萬曆期の特徴ある思想家であることは既によく知られたところであり、當時の農村問題についても、しばしば對策を發案し、官僚として、また退職後は郷紳として、自身それらの問題を解決すべく盡力したことも指摘されている。

しかし彼の思想體系そのものを別にして、彼の鄉村改革策のみに限つても、なおいまだ十分に検討されてはいないと思う。私は、萬曆後半期の華北農村の危機的狀況に對して、呂坤が提出した改革案——それは租税・徭役問題が中心的課題となっているのであるが、なかでも土地集中の進行にともなう中小農民の税役負擔の不公平の擴

大に對して、彼が採用しようとした土地丈量策を取りあげ検討したいと思う。

彼は土地丈量を基礎に、里甲の均平化を主唱したのであるが、これは將に江南各地で當時問題になり始めていた均田均役法と軌を一にするものであった。萬曆中期、河南の一部地域では呂坤の丈地均田になつた里甲均平化が實行されていたと見なされ、その實行者の一人が、これも有名な楊東明であつた。

こうして華北地域でも各地で各様の内容を持った均田均役法が實施されて行き、明末の動亂期には一時、その動きは杜絶えるが、清初康熙年間に、この法は華北の相當廣範圍に普及したと見なされる。

釋 對 揚

伊藤道治

『詩經』、特に西周金文には「對揚王休」という語が頻繁に使用される。鄭玄が、「王の策命に答えるの時、王の徳の美なるを稱揚す」と解してより、現在でも多くの研究者がその説に従う。この語は、西周中期の「冊命賜與形式」とよばれる殆んどの金文に使用されるため、一般には、當時の慣用語であるとされ、當時の君臣關係においてどのような意味をもち、政治上どのような働きをしたかについては、却つて等閑視されて來た。本論ではこの點について考察するが、その結論を左にあげる。

(1)對揚の語義は、單に王の策命に答えて、王の徳を稱揚するとい

うことではなく、王の恩寵、即ち王よりする恩賞或いは冊命の事實を青銅器の銘文として残すということであり、それは子孫にまで傳えられるべきものである。

(2)このように銘文に残すことは、單に記録として残されるのではなく、天子或いは主君に對して、忠誠を盡すことの誓いの意味をもち、子孫に對しても守られるべきことを示すものであり、そのために、冊命などの式場で、「對揚王休」と臣下が述べたものである。

従つて、この語は、君主による恩寵に對して、臣下が忠誠を表面するための、重要な政治的意味をもつていたことになる。然し西周末期には、このような重要な意味が弱まり、單なる慣用的な語に墮してしまつた。